

岐路

上卷

加賀乙彦

江苏工业学院图书馆
藏书章



新潮社



岐^き路^ろ 上卷

印刷 1988年6月5日

発行 1988年6月10日

著者 加賀^{かが おとひこ}乙彦

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

郵便番号 162

東京都新宿区矢来町71／振替東京 4-808

電話(03)266-5111業務部／(03)266-5411編集部

印刷所 二光印刷株式会社

製本所 加藤製本株式会社

定価 1500円

© Otohiko Kaga 1988, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-330803-6 C0093

岐

路

上
卷

装画
野田弘志

風が光り新緑が泡立った。五月幟さつきぼりが三匹競い合つて急流をさかのぼっている。花は乱れ砂煙が舞った。砂場にいた駿次が土埃にまかれて目を押えシャベルを投げだす。そのままひた走りに母のもとに来た。

「おかあさん」と泣きべそをかいている。

「目にゴミが入ったのかい」

「ううん、ほくおなかすいたの」

「おやおや、すぐお昼にしようね。でもおにいちやん遅いねえ」

追っつけ零時半なのに悠太が戻らない。十一時半に幼稚園は引けたはず、子供の足で七・八分の距離を、どこで道草くっているやら。心配しながらも、発熱して寝込んでいる研三にかまけてつい時を忘れていた。

駿次を食卓につかせ、研三の濡手拭を取り替えてやり、女中のなみやを呼んだところ、返事が無い。悠太を迎えにいくあいだ子供たちの守りを命じようと思ったのに、気のきかぬ子だ。台所で居

眠りでもしてるのかと覗いてみたがいらない。庭先の鶏が騒がしいので卵でも取りに行ったのかと縁側から窺ったがそこにもいない。広い家なので、どこかに隠れようと思えば簡単にできるのだ。ぼんぼん時計が零時半を打ったとき、表の通りで青バスが地鳴りをおこし、汲取屋の馬の蹄鉄があざ笑った。何だか急に不安になって女中を呼びながら、からっぽの座敷をいくつも渡り歩いた。二階を探してみようと階段に片足かけた瞬間、それに反応したように玄関の格子戸が開き、飛んでいってみると悠太ではなくて、なみやだった。下脹れの頬を真っ赤にしてせいせい息衝いている。

「どこへ行ってたんだね」といきなり怒鳴りつけた。「断りもなしに出掛けちゃ困るじゃないか」

「すみません、奥さん」

「奥さまとお言い」

「へえ、奥さま……」なみやは今にも泣き出すように目鼻を寄せた。福笑いのお多福のようなおかしい顔でつい怒りがにぶってしまう。この四月、千葉の在郷から来たばかりのこの子はまだ言葉遣いがなっていない。敬語の用法も滅茶苦茶で、どうかすると奥さまにむかつて「行っているか」なんて尋ねる。そうかと思うと「お旦那さまがお帰りになつていらつしやいましたでございます……」など持って回った言い方をする。しかし邪気はないし、高等小学校を出てから家業の魚屋を手伝っていただけあって、まだ十六なのに魚料理の庖丁さばきはあざやかだし、重いものを平気で持つ体力もあって調法している。

「悠太がまだ帰らないんだけど」

「それでございます」なみやは小さな目を切り裂くように開いた。「坊っちゃんがおそいで、心配で、見てきましたんでございます」

「何を」

「幼稚園だね」なみやは下駄を踏み鳴らした。

「それで悠太はいたのかえ」

「いえ、いません。誰もいないだよ。みんな帰っちゃっただね」

「先生はいらしたんじゃないの」

「いえ、いらしたんじゃないでした」

「ともかく、あんた、子供たちを見ていておくれ。そう、駿次にお昼を食べさせてね。わたしはもう一度探してくるから」

「へい」なみやは框まであがったが、あわててまた下駄に飛びおりた。女中は勝手口から出入りするものだと奥さまにくどく言われていたのである。

門前から石段を下った先が歩道である。大通りは、澄明な真昼の陽光を浴びて鯨の背のように黒々と光っていた。往來の車は跡絶え馬糞が点々と落ちてゐる。七年前、初江がこの西大久保一丁目の小暮家に嫁いできたとき、あたりにはまだ田園の名残りがあつて、植木屋の樹木や庭石、仕舞屋の隣に畑地があり、それにとくに雨の日は道がぬかつて高足駄の齒に土くれがこびりつき難儀して、生れ育った三田綱町にくらべると大変な田舎に來たと嘆いたものだった。それが、植木屋を立ち退かせ畑を潰して工事が始まり、いつのまにか並木や歩道をそなえた「改正道路」が家のまんなを通り、家の敷地も大分削られ、低い路面まで石段で通うことになった。改正道路は池袋、新宿、渋谷を結ぶとあつて、青バスの路線となり円タクも繁々と來て、足の便がぐんとよくなった。道路沿いに家々が新築された。多く板塀や竹垣に囲まれ、小さな庭と洋風応接間をしつらえた「文化住宅」で、明治時代、この地が豊多摩郡大久保村と言われた時代より建っている小暮のわが家は、古めかしさで目立つようになつた。いま、てらてらと光るアスファルトの路面を見通しながら、初江は結婚当初の田舎じみた景色が陽炎のように揺らめきのぼる氣がした。黒

光りしている大通りから七年間の時間が染み出して来る、そんな妙な気がした。

わが家は坂の中ほどにあり、幼稚園へ行くには坂を登りきってさらに下って行かねばならぬ。丁度坂の頂きに精神病院が建っていた。鉄格子のはまった狭い窓の中は暗く、水族館の魚のようにうごめく患者たちが薄気味悪くて、いつもは足早に通りすぎるのだが、今はその見晴しを利用して大通りを眺め渡した。車が三台通りすぎたあと、路は広場のように無人であった。坂の途中で小学生が竹棒の先にベীগマをつけて道路で擦っていた（そうやってベীগマをピカピカに磨くものらしい）が、悠太は見付からなかった。

坂をおりた所にミルクホールの白暖簾がはためいていた。暖簾の先がガラス戸を打ち、土工らしい数人が菓子パンを牛乳で流しこんでいた。男の一人が初江に気付いて、鋭い視線でこちらをひっぱたくようにすると、顔をしかめてそっぽを向いた。不到着のままで、菌のちびた庭下駄をつっかけてしまい、それに風で束髪が乱れ、ひどい有様なのに気がついた。夕方近所に買い物に出るときでさえ念入りに化粧して髪を梳らないと気がすまぬ彼女は、まして幼稚園を訪れるとなったらきちんと着替えて出るのが習いであつたから、自分の身形をあさしく思った。が、今はそんなことはどうでもいいと思い返し、小走りに大通りを横切つて小路に入った。さいわい人通りはまれで、幼稚園のある丘のふもとにすぐ行き着いた。

幼稚園は小学校と中学校を備えた高千穂学園に付属していた。学校は土曜日の引け時で小中学生の黒っぽい群が坂に流れてきた。校門前でしばらく待ってみたが幼稚園児は見当らず、小中学生の群を掻き分けるようにして坂を登った。

幼稚園は急斜面にへばりつくように建っていた。ドアには鍵がかかり呼鈴には応答がない。庭へまわると砂場のシャベルやバケツは整然と棚に片付けられていた。なみやの言つたとおりだつた。では悠太はどこへ行つたのか。庭先から下に海のように果しなく続く薨を前に途方に暮れた。

今の今まで悠太は途中のどこかで道草を喰っていると思っていたのだ。悠太は、腕白な弟の駿次とちがって、おとなしい子だが、変に熱中癖があり、何か興味のある対象を見付けると、店先や町角に立ちどまって、いつまでも観察していたりする。つい十日ばかり前も帰りが遅いので迎えにいくと、鍛冶屋が灼熱した鉄をハンマーで打つのをじっと見物していた。叱ろうとすると、鍛冶屋の親仁が、この坊やえらく熱心なもんだからいろいろ説明してやったよと笑った。が、いま道草でないとするどこへ行つたのか。最近人攫いが多いと新聞に出ていて、夫の悠次から氣をつけるよう注意されたのを思い出し、どきんとした。坂を転がるように走った。着物の裾がはだけて脚にまつわりつくのにかまわず一氣に駆けおりた。

校門前には小さな店屋が街の皺のように身を寄せ合っていた。文房具屋、駄菓子屋、鍛冶屋、豆腐屋、角の三角形の船の舳先そっくりの家は洋服屋だ。坂をのほり切れば抜弁天の高台へ出る。軒並みに店の中をのぞき、露地をうかがい、抜弁天の前から坂を行きかえして探し歩いた。

前田邸の前に来た。加賀の前田侯爵の別邸で広大なお屋敷だ。道から広い砂利道が奥の向唐門まで続き、生籬のむこうにさらに砂利道がのびて車寄せのある玄關に到達する。手入れの行き届いた庭園は、背低くの植込みを配した池のむこうでさらに奥深い森林へと移行している。よく子供がこの邸内に忍び入って遊ぶと聞いていたので、生籬の近くまで行って中をのぞいてみた。門番もない邸内には、たしかに子供だったら簡単に忍びこめそうだが、多分悠太はそんなことをしないという氣がした。小暮家の先祖は代々加賀藩士で、夫小暮悠次の父、悠之進は維新の時まで武士であって、維新後は前田侯爵家の家扶を勤めた。悠之進は大正の末に死亡したが、そのあと家を継いだ悠次は、元旦に駒場の前田侯爵家への年始参りを欠かさず、去年からは長男の悠太を連れて年始におもむいていた。前田侯爵家は、わが家では前田様といわれて尊敬されているので、その前田様のお屋敷に悠太が忍びこむなど、あの臆病な性格からして考えられない。初江

は侯爵邸から道へとつて返し、消防署の前で立ち止った。

悠太はこの消防自動車が好きで、よくそれを見詰めていることがあった。一度、幼稚園の帰り火事で出動するのに行き会ひ、消防夫たちの集合から鐘とサイレンを鳴らして消防自動車が去るまでを見物していて、帰宅がおそくなったことがある。が、今、赤い車は鎮り返り、火の見櫓の上では制服の署員が規則正しく巡り歩いていた。

なぜか胸が熱くなり、悠太はもう家に帰っているという予感がおこった。力一杯に走った。下駄の鼻緒が切れた。すげかえる余裕はなく、えい面倒ともう片方も脱ぎ、足袋はだしで走った。もう見栄も外聞もない。人々が驚いて見えていると思ったが気にならない。汗まみれで玄関に転げこんだ。

「悠太」と呼ぶと、なみやが出てきた。

「坊っちゃんはまだですだ」

「帰って来ないのかえ」

「へえ」

ああ、どうしよう。もうすぐ一時だった。いくらなんでも一時間半も道草を喰うなんて考えられない。いや、道草ではないのだ。では、人攫いに遭ったのか。まさかと思うが、そうでないとは言いきれない。なみやの心配げな顔が、「奥さまどうしまししょう」と言いたげに見上げていた。

「駿次の御飯はすんだのね。もしも研三が目を覚ましたら、御飯を食べさせてやって」

女中を奥に追いやると、自分に落着けと言ひながら柱の受話器を取った。落着いているつもりが手が震えてあやうく落しそうになった。交換手に「三田の八百十一番」と里の番号を言つてしまつてから、悠次の会社に先に電話すべきだったかと思ひ、この時刻には夫は会社を出たあとだろうと考え直した。

出たのは看護婦の誰かだった。最近来た人らしく初江の名前だけでは通じなかった。院長の娘です、母を呼んで下さいと付け加えてやつと通じた。母の菊江の声を聞くと、急に幼い自分にもどったようになって訴えた。

「大変なのよ。悠太が帰らないの。幼稚園が引けてもう一時間半も経つのに、まだ帰らないの」自分のした探索を事細かに語り、やや誇張して考えられる限りの小路脇道を風潰しに探した、だから悠太はいつもの道草ではなく人攫いに遭った、つまり誘拐されたに違いないと言った。

「……というわけ。どうしたの、おかあさま聞いてらっしゃるの」

「聞いてるわよ」

「黙ってらっしゃるんだもの」

「あなたが一人で喋りまくってるんだもの」

「警察に連絡したほうがいいかしら」

「お待ち。もうすこし待つよ。あわてちゃだめよ」

「もう待てないわ……その間に殺されてしまう。ああ、どうしよう」

「大丈夫ですよ。誘拐犯人だったら、子供を大事にして連絡してきます。あいつらはお金が欲しいだけだから」

「ああ誘拐だったらどうしよう。ねえ、おかあさま、家にはお金なんかないのよ。本当よ」初江は、女中に聞えぬようささやいた。実のところ彼女は小暮家の財産がどのくらいか見当もつかないのだった。生活費は毎月、夫から手渡しで貰っていて、夫の月給袋は見たことがなかった。時々、夫は株券や債券を整理し分類しているけれども、それがどのくらいの額なのか教えなかったし、たとえ教えてくれたとしても、何やら複雑な機能を持つ紙の真価など彼女には理解できなかったろう。結婚したての頃、まだ家計のやりくりが不得手で夫の手渡しだけでは足りぬことが

多かつたが、夫に再請求するのは主婦の無能力を証すように言い出せず、里の母に泣きついて不足分を補ってもらった。困ったのは、袋物とか帯とか羽織とか模様類とか小紋とかを買いたいと思つたときで、夫にそういう要求を持ち出すのが億劫で、しかしそのくらいは夫に出させるものだとなめられて、おそろおそろ言い出してみると、氣むずかしい顔はしたものの、また一度の請求ではかなわず三度ぐらい言い出さねばならぬものの（だからこそ億劫なのだが）、結局は必要な額は出してくれた。また、古い家のため、瓦がずれて雨洩りしたり壁が崩れたり羽目板が剥がれたりするが、夫はめつたに大工を呼ばず自分で修理するのだった。これは、大工を一人おかけにして始終新しい普請をさせていた里の父を見てきた初江には驚くべきことであつた。

梯子をかけて屋根にのぼったり、壁土をといて左官の真似事をしたり、材木屋から板をかついできて自分で鋸を引いたりしている夫を、彼女は半ばたのもしく、半ばは何だか痛ましい思いで見た。はじめは大工仕事が好きでやっていると察していたのだが、それでもなく嫌々ながら、どうも大工の手間賃を節約するためやっているらしいとも氣付いてきた。それが証拠に、家の立付けが悪くて雨戸が開かなくなり、すこし削ってほしいと初江が持ちかけたとき、悠次はいたく不機嫌で、まるで家の欠陥を発見したのは彼女の責任だと言わんばかりの目付きで睨んだ。要するに家の修繕については、彼女が自分の意見として言い出すのではなく、夫が必要を発見し、自分で大工仕事を決心するまで待つのが得策だと彼女は学んだのである。しかし、夫が節約するのは金がないからだとはどうも考えられず、それが夫の性質なのだと思うことも嫌で、そういうふうにするのが小暮家の家風なのだと漠然と感ずることにしていた。

「大丈夫、誘拐なんかじゃないよ」母は声を励ました。

「でも、もしかしたら……わたし、息が詰って体が震えてるの。心配で心配で……」
「初江」と菊江はさすように言った。「子供というものはね、突然とんでもないことをするこ

とがある。悠ちゃんは、あれで、なかなか思い切ったことをやるたちでしょ」

「そうかしら。臆病な子よ」

「そう、臆病な子にかぎって思い切ったことをやるのよ」

「思い切ったってどんなこと」

「ちょっと散歩するとか、知らない街へ行ってみるとか……大丈夫よ。ちょっと迷子になってるだけよ。待っててごらん、帰ってくるから」

「待ってて大丈夫かしら。心当りを探したほうがいいみたい」

「おまえ、心当りがあるのかい」

「ないわ……」初江は考えた。悠太がひとりで行ける唯一の場所は、近所に住む伯母の脇美津の家だが今まで母のわたしにことわりもなしに勝手に行ったことはないのだ。

「旦那さまがお帰りになりました」となみやが告げに来た。初江はあわてて電話を切って玄関へ出た。黒靴を脇に靴をぬいでいる悠次に「お帰りのさいませ」と手をつく、初江は一気に言った。

「大変なんです。悠太がまだ帰ってこないの」

「え」悠次は、立ちあがりながら、度の強い眼鏡の、ふっくらと白い顔で見下した。「どういうわけなんだい」

「幼稚園はとくに、十一時半には終ってるのに、まだ帰らないんです」

「おかしいね。探してみたのか」

「はい、幼稚園へ行って、そのあたりずっと探してみました。あなた、どうしましょう。人攫いにでも連れてかれたんだったら……警察に電話したほうがいいかしら」と早口に、初江は廊下を行く悠次を追った。

彼は洋服簞笥にむかつて上着をぬぎネクタイをはずすと、「ほら、この前ゴルフのときのセーター」と言った。

「ゴルフへいらつしやるの」

「いや、鵜沼だ」

鵜沼といえば麻雀だ。先代の小暮悠之進の書生をしていた佐々竜一という人が住んでいて、そこへ悠次は土日泊り込みで麻雀をしに行くのだった。

セーターを着込むと悠次はズボンのポケットから懐中時計を引き出して見た。そして、せかsekakaと座敷を巡り始めた。

「ねえ、あなた、どうしましょう。悠太の……」と初江が言いさしたとき、「今、かんがえてる」と悠次が怒鳴った。額に青筋が立って色白の顔が紅潮している。自分のしようとしたことを邪魔されたとき、彼はよくこういう突発的な怒りを噴出させる。が、その怒りがすぐ消えるのを知っている初江は平気でおも言った。

「心配なの。こうしてるあいだにも悠太がどうかされやしないかと……」

「どうしてひとりで行かせたんだ。送り迎えしてやればいいのに。危いじゃないか」

「だって……」初江はあつけにとられて、夫の渋面を見た。むろん幼稚園の送り迎えを彼女はしていたのである。が、ある日、脇美津が悠次に「幼稚園ぐらいひとりで行かせたらどうだね。悠太ちゃんはまだ七つなんだからね。甘やかすすぎだよ」と言い、悠次が初江にひとりで行かせろと命令したのであった。

「だってお義姉さまが、そうしろとおっしゃったんじゃないやありませんか」

「はあそうだったな」と悠次は苦笑した。表情から角がとれて、度の強い眼鏡の底で目が細くなった。彼は腕組みして考えこみ、やっと言った。

「もう一度手分けして探そう。脇にも応援を頼んで」

「絶対にいやですよ。おねえさまに知られたら、全部わたしの責任にされるんですもの」

「ひとりで通園させろと言ったのはねえさんだ。責任はむこうにある」

「そんな理屈が通るお方ですか。こうおっしゃるに決ってます——わたしが寄道をしないように言いかけなかったとか、知らない人に口をきかないよう仕付けなかったとか」

「人数が足りないよ。ねえさんとこのはるやの手を借りないとな。うちはおまえひとりしかないし……」

「おや、あなたはどくなさるおつもり」

「おれは約束があるんだ。鶴沼に五時に集合する約束なんだ。みんなを待たせては悪い」

「そんな……困ります。あなたがいらっしやらないと、わたしどうしていいか。もしもの場合……」

「悠太は帰ってくるさ。どっかで友達と遊んでるんだろう。きょうは会社の課長も来るんだ。

佐々が招待したんでわざわざ来るんだ。おれが欠けるわけにいかないよ」悠次はまた懐中時計を見た。今にも出掛けそうな素振だ。

「わかりました。三田に応援をたのみます。あそこは手が多いから大勢来てくれるでしょう」

「なにも三田にたのまなくたって」と悠次はひるんだ。初江の父、時田利平を彼は煙たがっていた。二年前研三が時田病院で生れたとき、たまたま日曜日で菅平にスキーに行っていた悠次は出産にまにあわず、翌々日になってやっと姿をあらわして、利平から「自分の妻が出産で苦しんでいるとき、夫が西洋かぶれの雪遊びなどしていたとは何事だ」とこっぴどく叱責された。近頃流行のスキーがどんなものかむろん利平は知らなかったのだし、大学生時代東京帝大の山岳部にいてスキーに親しみ、その時もOBとして特別に懇請されて学生の指導に行っていた悠次ではあつ

たが、岳父の剣幕には弁解もできず頭を下げるだけだった。本当のところは、悠太、駿次と二人男の子ができたので、こんどは女の子がほしいというのが悠次の強い希望で、生れた子が男だという電報をスキー場で受け取った彼にはすぐ山をおりる気もおこらなかったのだ。ともかく、この一件以後、彼は妻の里を敬遠し、正月に儀礼的な訪問をするのみとなったし、何か家庭内の不祥事を岳父に知られるのを怖れるようになった。

「よし、わかった。おれも探す」と悠次は折れた。するとこんどは心細げな顔付きとなり、「しかし、どうやって探したらいいかな」とつぶやいた。

「やっぱり警察に届けましょうか」

「そんなに大袈裟にしなくてもいいだろう」

「でも迷子として交番で保護されてるかも知れないし」

「それならこつちへ連絡してくるさ。悠太にはうちの住所も教えてあるしさ」

「じゃ、もう一度わたしたちで探してみましよう。わたし、とにかく幼稚園の近くを探します。

あなたは、家の近所を見て下さらない。なみやには子供たちを……そうそう、研三が熱を出してるんです。九度四分もあるんです」

初江は幼い子の枕元にかがみこんだ。まだ眠っている。今にも詰りそうな鼻孔がひくひく動き、鞆のような額は湿って熱い。蒲団を掛け直してやり、ふと見回すと駿次の姿がなかった。いや、いた、柿の木の下で三輪車をこいでいた。鶏小屋に近付かぬよう、いつかみたいに手をつかれからねと注意して表に走り出た。悠太、どこへ行ってしまったの。ほんとに、どこにいたのだろう。

坂を登りかけ、考え直して下ることにした。坂を下りきったところに市電の線路が大通りを横切っている。線路に沿って行くと、線路が分岐して数を増し、*“大久保車庫”*のがらんとした建物